様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　18 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０９０５
研究課題名（和文）抽象絵画における表現および鑑賞指導のための統合的研究

研究課題名（英文）　Integrative Research for Work and Appreciation Coaching in Abstract　painting

研究代表者
新井　義史（ARAI YOSHIFUMI）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：１０１４２７６２

研究成果の概要（和文）：抽象絵画とりわけドローイング的抽象表現の「作品理解」のための効果的な方法の検討およびその「制作」のための段階的なトレーニング方法を開発・試行した。(1)水性系材料による表現サンプルの収集と分類、(2) ドローイング的表現の視覚心理的側面に関する検討を行い、(3)表現指導のための「鑑賞＋演習プログラム」等を作成した。３年間の考察の中で表現および鑑賞を一体化させて指導することの重要性がより明確化した。

研究成果の概要（英文）：I developed and tried a gradual training method about "Understanding of pictures" and "Make a drawing" of abstract painting.(1) The classification collection of a sample which were drawn using aqueous-based materials,(2)Visual psychological examination about drawing, (3) The design for coaching of "appreciation + exercise program". I think that's very important which combined coaching work and appreciation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：美術教育
科研費の分科・細目：教科教育学
キーワード：美術教育、図画工作、表現指導、鑑賞指導、抽象絵画、ドローイング、抽象表現主義

１．研究開始当初の背景

(1)問題の所在

本研究が対象とするものは、「ドローイング的表現」による「抽象絵画」である。抽象表現による絵画・彫刻作品は、広場やホテルのロビーなどパブリックな場所に展示されるようになり、目にする機会が多くなった。しかし、抽象作品の制作および鑑賞方法の指導に関しては、はなはだ不十分な状況である。学校教育の美術では具象傾向を重視するこ

とから、抽象絵画を描くための段階的なトレーニングは行われていない。また作品理解のための効果的な鑑賞方法もほとんど検討されていない。

ところで、抽象絵画の内でも「幾何学的形態の傾向」は、すでに「基礎造形」として、デザイン・構成の方面で研究が進められてきた。しかし、「表現主義的・有機的傾向」に関する研究は、基礎造形の研究の一部としては進められてきたものの、「絵画作品」の観点からの制作手法や鑑賞方法としては、本格的な検討がなされているとは言い難い。したがって、「表現主義的・有機的傾向」の抽象表現を「ドローイング的表現」と呼び、この傾向に限定して検討を行うこととした。

(2)研究代表者の研究状況

研究代表者（新井）は、これまで教員養成系大学において西洋画担当教員として表現教育にあたってきた。作品制作・発表活動と併せて、美術作品と大衆・市民とを結びつけるための研究・実践活動として、20 年前からワークショップや鑑賞教育方法論の検討を行ってきた。その結果、19 世紀までの「伝統的美術」を分かりやすく紹介するための方法論については一定の成果を得たものと考える。ところで、20 世紀に誕生した「抽象作品」は、今日の現代美術を代弁する表現傾向である。しかし、この抽象傾向の作品には通常の社会通念から独立した特殊性があり、同様の手法を用いることが困難なことを感じた。そこで、授業実践を通じて「抽象絵画」の制作・理解のための諸方法を開発するための活動にとり組むこととした。

２．研究の目的

(1)研究の目的

本研究の目的は、抽象絵画とりわけドローイング的抽象表現の「作品理解」のための効果的な方法の検討およびその「制作」のための段階的なトレーニング方法を開発することである。

ドローイング的抽象表現は、従来の学校の美術教育では「モダンテクニック」の呼称で実施され、造形遊びやデザイン活動の手法の一部として扱われることが多かった。「表現＝制作」する場合の「絵画作品」としての完成度に至るためには、新たな指導方法が必要になると考え、そのために「分析的で分かりやすい解説」「鑑賞活動の重視」および「鑑賞＋演習セットプログラム」等の観点による統合的研究を企図した。

(2)具体的な達成目標

前述の研究目的を踏まえ、以下の４点についての資料作成・分析活動・検討を行った。

①ドローイング的表現を収集し、分類・整理することにより、ドローイング的表現の広がりと限界とを検討する。また、このデータを元にしたサンプリング集を作成する。

②ドローイング的表現の視覚心理的側面に関する検討を行う。文献による検討内容を整理・要約し、その内容をもとに収集した表現サンプルを分析する。

③表現指導のための「鑑賞＋演習セットプログラム」を作成する。鑑賞活動を重視し分析的で分かりやすい解説による教育プログラムを開発し試行する。

④「水性系材料による表現サンプリング集」「鑑賞＋演習セットプログラム」「プログラムの試行結果作品」等をデジタルデータ化し、ＷＥＢを通じて公開する。

３．研究の方法

(1)表現サンプルの収集と分類

①絵の具や筆など、一般的に用いられる描画材を使用し、学生の実習を通じて具体的で多様な作例データ（表現サンプル）を収集し、②それらをデジタルデータ化し、整理・分類する。

(2) 造形要素の情動性に関する文献整理

①カンディンスキーにおける絵画の造形要素に関する著作、およびアルンハイムによる視覚心理的な分析結果を整理・要約し、②墨によるドローイング（表現サンプル）に対する情動性の適用度を検証する。

(3) 表現指導プログラムの作成と試行

①抽象絵画理解のための指導方法を検討し、「鑑賞＋演習プログラム」およびテキストを新たに作成する。②「鑑賞＋演習プログラム」を授業において試行し、演習による作品を通じて理解度を確認する。

(4)デジタルの手法による制作方法の試行

ドローイング的表現は、身体的感覚をベースに表現するものであることから、いわゆるデッサン力に拘束されず、色彩と形態による表現そのものを楽しむことが可能であると考える。タブレットやスキャナなどを初心者でも効果的に使用しうるような表現レッスン方法を検討する。

４．研究成果

(1)水性系材料による表現の収集と分類

2009～2011 年の３年間、水性系材料によるドローイング的表現サンプルを収集した。授業を通じて延べ 150 名の学生が作成した約 1500 枚の試料の中から、400 件のサンプルを選別収集した。各サンプルは、12×12cm サイズの画用紙を用い、「水性系諸材料を使用したオリジナルなドローイング表現」をテーマに作成に取り組ませた。一人 10 枚程度作成することとし、初年度に約 200 枚のサンプルを収集した。翌 2010・2011 年度には新たに各 100 枚ずつを追加し、合計 400 枚のサンプルを収集した。

図 1　サンプル作成

ほとんどの学生は抽象表現への理解が無いために、この小さなサイズの画面にすら、従来の絵画の概念による、何らかの意味を込めた絵画を描いてしまう。ドローイング的な感覚、ならびに行為による柔軟な発想による表現として取り組ませるためには「材料実験・表現研究」として従来の絵画制作とは異なる意識化が必要である。収集サンプルの結果は、1500 枚の内の６割が「にじみ」「ぼかし」「うす塗り」に類するものであり、それに次いで１割が「かすれ」の要素を用いた例であった。1950～60 年代にかけてのカラーフィールドペインティングにおける表現の多くは、これら絵具と溶剤と用具の特性によるものである。素材体験をベースにした技法的観点による実技体験は、抽象絵画の入門的指導のためには最も自然な入り口であると考える。

サンプルをスキャニングし、制作者によるコメントをつけ、材料・用具・行為の傾向別に分類し、データベースにまとめる作業を行った。

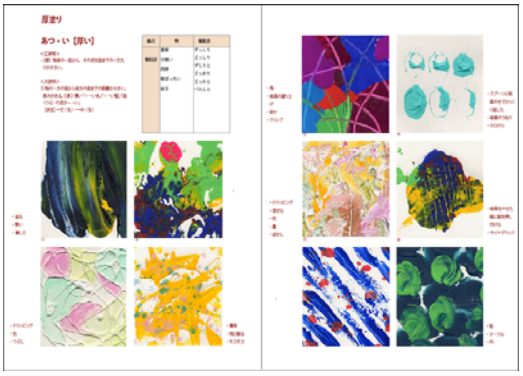

図 2　サンプルの傾向別分類

(2)視覚心理的な画面分析の検討

多くの抽象絵画は、意味よりも感覚的および造形性の面から構築されている。したがって抽象絵画の理解に関しては、その構造の底にある視覚心理における情動性の観点からの解釈が有効であるとの仮説を立て、それに関する内容を記述した文献を検討した。クライント、G.ケペシュ、A・ドンデス、朝倉直己などが、視覚全般・写真・造形要素・構成学などの各分野を代表する著作として知られている。しかしながらドローイング的抽象表現の分析・理解に最も有効な研究は、抽象

図 3　造形要素の情動性分析

的フォルムに関する諸原理を分析したカンディンスキーの著作「点・線・面」、および心理学的にその原理を説明したアルンハイムの主著「視覚的思考」に重要な観点があることがわかった。したがって両者の視覚心理的な分析結果を比較検討・整理し、収集した表現サンプルを用いてその有意性を検証した。その結果、予想に反し、フォルムや配置理論が了解できないケースが多く確認された。よって、視覚心理的な画面分析の問題を発展させて「抽象絵画の構造理解のための感性心理的認知過程の計測と分析（課題番号24531093）H24～26」として引き続き研究することとした。

(3)表現指導のための「鑑賞＋演習プログラム」作成

かねてより美術教育における鑑賞指導の不足が指摘されてきた。作品制作を目的とした指導内容の場合には、製作者のオリジナリティを尊重する姿勢から参考事例を見せずに制作させる方法が多くとられた。しかし「鑑賞+演習プログラム」による指導はそれとは反対の立場を取り、より多くの具体的な作例や参考となる情報を文献資料や画像・VTRを通じてできるだけ示す。それにより作品や製作者を身近に感じさせることを狙っている。

図 4　演習光景

今回の作成プログラムは以下のようである。

①ドローイング理解のためのプログラム

（いずれもパワーポイントを用いた図版中心の解説および参考VTRを組み合わせた内容）

(a)「自画像にみるクロッキーとドローイング」(解説20分+演習60分)、(b)「ペン描画による感覚的ドローイング」(解説20分+演習20分)、(c)「和筆を用いたドローイング」(解説10分+演習30分)、(d)「ヘリング風・カラードローイング」(解説20分+演習60分)、(e)「クレーを読む」(解説30分+鑑賞演習20分)、(f)「ミロのドローイング(カラーペン)」(解説20分+演習80分)

図 5　演習による作例

②抽象絵画理解のためのプログラム

（いずれも図版および参考 VTR を組み合わせパワーポイントを用いた解説内容）

(g)「抽象絵画の基礎理解」(解説 60 分)、(h)「キュビスムにおける抽象化」(解説 60 分+演習 60 分)、(i)「カンディンスキーにおける抽象化」(解説 60 分+演習 60 分)、(j)「マティスとモンドリアンを理解する」(解説 60 分+演習 60 分)、(k)「アンフォルメルの用具と行為性」(解説 60 分+演習 60 分)、(l)「抽象表現主義とアクション P」(解説 60 分+演習 60 分)、(m)「カラーフィールドペインティング」(解説 60 分+演習 60 分)、(n)「抽象絵画の源流」(解説 60 分)

(4)デジタルによる抽象制作の試行

8名の学生を対象に、カラーフィールドペインティングタイプのデジタルによる抽象表現制作を試行した。手法の一般化を考慮し、フリーソフトのペイント系アプリケーションの「Artweaver 0.5 (Windows用)」を使用した。①散布ブラシを使用したサム・フラン

シスの作風、②クローン機能を使用したフランケンサーラ風の制作の２種類を試みさせた。共に短時間のうちにそれぞれの作家の作風をシュミレートでき、表現特徴を理解するためには適した手法であることが伺えた。

図 6　デジタルによる試作

2009―2011年にかけて、以上のような諸種の指導プログラムを開発した。これらの内容を授業において施行した演習結果、および指導に際して使用したテキストはWEBページにおいて公開した。

(5) まとめ

本研究の主な目的は、抽象絵画を描くための段階的なトレーニングおよび作品理解のための効果的な鑑賞方法の検討である。この３年間の考察の中で、表現および鑑賞を一体化させて指導することの重要性がより明確化した。とりわけ以下３種のアプローチを融合させた指導方法を組み合わせて指導することが重要であろうと考える。

①「材料・技法的アプローチ」として、水性系諸材料を使用したドローイング的表現（絵の具・用具などの制作面）

②「理論的アプローチ（史的展開の理解）」とりわけ講義・解説に際しては、全体を通じて見渡せるテキストの存在が重要であることが明確になった。

③「視覚心理的アプローチ」として、心理的理解に関する指導内容。感覚的画面構造への関心と理解は抽象表現の鑑賞と制作にとって最も重視すべき知識であると考える。

これら３種のアプローチを一体化させた指導を行うことで、抽象絵画のより本質的な理解につながるものと考える。

これまでの美術教育において、ドローイングに代表される抽象的な感覚表現が研究対象になることは少なかった。しかし数年前から、大学美術教育学会でもドローイング教育に対する共同研究への取り組みを始めたところである。今回収集した試作データがそうした活動の一助になることを期待している。

なお、絵画作品の鑑賞・表現に関しては、そこで使用される「用語」に関する理解を欠くことができない。今回の諸検討の中から、抽象表現に際しては、具象的表現における内容とは異なる「用語」理解が必要であることを痛感した。形・色彩・明暗・変化等々のダイレクトに感覚に訴えかける抽象表現の情報が自己の内部に生じさせる感情の意識化には、それを認識するための「造形言語」としての「語彙」を身につけている必要がある。「抽象」や「現代美術」が「分からない」とされる理由には、そこにおける「造形言語」を翻訳するための鑑賞者の「語彙力」の欠如があると考えられる。したがって、広くビジュアル作品を鑑賞する際の感性心理的内容の検討のために、今後は表現と鑑賞に関する「言語データ」に関して検討したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 新井義史、非再現的ドローイングにおける視覚的力動性の検証、北海道教育大学紀要(教育科学編)、査読無、第 61 巻第 2 号、2011 年 3 月、297-312

② 新井義史、絵画制作におけるイメージ形成の指導 (1) ―C. D. フリードリヒの象徴と崇高の理解 ―、北海道教育大学紀要(教育科学編)、査読無、第 60 巻第 1 号、2009 年 8 月、129-140

〔その他〕

成果物は次のように取りまとめ、研究代表者のホームページを通じて公開した。（1）～(3) は PDF データ、(4) は主として VTR+ PDF データである。

■研究成果公開 URL

http://araix.web.fc2.com/k1/kaken.html

(1) 水性系材料による表現分類
(材料・技法的アプローチ)
http://araix.web.fc2.com/k1/01

(2) 視覚心理的な画面分析の検証
(視覚心理的アプローチ)
http://araix.web.fc2.com/k1/02

(3) デジタルによる抽象制作の試行
http://araix.web.fc2.com/k1/03

(4) 表現指導のための「鑑賞・演習」セットプログラムおよび作例
(理論的アプローチ)
http://araix.web.fc2.com/k1/001～009
http://araix.web.fc2.com/k1/a～ f

①テキスト、②抽象絵画の基礎理解、③キュビスムにおける抽象化、④カンディンスキーにおける抽象化、⑤マティスとモンドリアンを理解する、⑥アンフォルメルの素材と行為性、⑦抽象表現主義とアクションペインティング、⑧カラーフィールドペインティング、⑨抽象絵画の源流

６．研究組織

(1)研究代表者

新井　義史（ARAI YOSHIFUMI）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10142762